竹取物語（かぐや姫の嘆き）　＊＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

ア八月十五日ばかりの月に出でゐて、かぐや姫、いといたく泣き給ふ。人目も今はA つつみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも、「何事ぞ。」と問ひ騒ぐ。かぐや姫、泣く泣く言ふ、「さきざき申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過ごし侍りつるなり。Iさのみやはとて、うち出で侍りぬるぞ。おのが身は、この国の人にもあらず。月の都の人なり。それを、昔の契りありけるによりてなむ、この世界にはB まうで来たりける。今は帰るべきになりにければ、この月の十五日に、かのもとの国より、迎へに人々まうで来むず。さらず、C まかりぬべければ、おぼし嘆かむが悲しきことを、この春より、ii思ひ嘆き侍るなり。」と言ひて、いみじく泣くを、翁、「こは、なでふことのたまふぞ。竹の中より見つけ聞こえたりしかど、菜種の大きさおはせしを、わが丈立ち並ぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か迎へ聞こえむ。Iiまさに許さむや。」と言ひて、「我こそ死なめ。」とて、泣きのD のしること、いと堪へがたげなり。

かぐや姫のいはく、「月の都の人にて、父母あり。片時の間とてIi①かの国よりまうで来しかども、かく、②この国にはあまたの年を経ぬるになむありける。かの国の父母のこともおぼえず、ここには、かく久しく遊び聞こえて、慣らひ奉れり。Iiiいみじからむ心地もせず、悲しくのみある。されど、おのが心ならず、まかりなむとする。」と言ひて、もろともにいみじう泣く。

使はるる人々も、年ごろ慣らひて、立ち別れなむことを、心ばへなどあてやかにうつくしかりつることを見慣らひて、恋しからむことの堪へがたく、湯水飲まれず、同じ心に嘆かしがりけり。

問一　二重傍線部ア～ウの漢字の読みを現代仮名遣いを用いて平仮名で書きなさい。

問二　二重波線部i、iiの主語として適当な人物を次の中から選び、番号で答えなさい。

1　使はるる人々　　2　親ども　　3　人々　　4　かぐや姫　　5　かの国の父母

問三　波線部A～Dの語の終止形の意味を答えなさい。

問四　波線部Eの、かぐや姫が「申さむと思」っていたことを表している部分を本文中から探し出し、その初めと終わりの五字を答えなさい。（句読点を含む）

問五　点線部①、②が表している所をそれぞれ具体的に答えなさい。

問六　かぐや姫が天上に帰ってしまうことによる翁の悲しみを最もよく表している部分を本文中より十字以内で抜き出し、現代語訳して答えなさい。

問七　傍線部I～IIIの現代語訳として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

I
ア　今こそ許すことにしよう。
イ　どうして許そうか。
ウ　今こそ許すことができるだろうか。
エ　どうして許そうとしたのだろうか。

II
ア　そうばかりしているわけにはいかないと思って、家から出るのです。
イ　ずっとだまったままでいたかったと思うのですが、とうとう打ち明けましょう。
ウ　ずっとそれでいられましょうかと思って、打ち明けてしまうのです。
エ　ずっと一緒に暮らしたいと思っていましたが、仕方なく家から出るのです。

III
ア　（月の都に帰るのも）うれしく思われる気持ちがしません。
イ　（月の都に帰るのは）たいして嫌だという気がしません。
ウ　（月の都に帰るのも）とてもうれしいという気持ちがいたします。
エ　（月の都に帰るのは）嫌だという気持ちがいたします。

問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
Ⅰ		①		A	i	ア
Ⅱ					ii	
Ⅲ		②		B		イ
			﹀			
				C		ウ
				D		

学年
組
番号
氏名
得点

竹取物語（かぐや姫の嘆き）　＊＊

〔出題の意図と留意点〕　重要古語を押さえて登場人物ずにいたことで、泣いていた原因。**問五**は指示語。二つや姫や翁たちの気持ちを捉えさせたい。

☆解答例と配点

問一　**ア**　はづき　**イ**　ちぎ（り）　**ウ**　たてまつ（り）　〈2点×3〉

問二　ⅰ　2　ⅱ　4　〈2点×2〉

問三　**A**　遠慮する　**B**　参上する、うかがう　**C**　おいとまする、退出する　**D**　大声をあげて騒ぐ　〈3点×4〉

問四　おのが身は～で来むず。　〈4点〉

問五　①　月の都（天上界）　②　地上（人間界）　〈3点×2〉

問六　私こそ死んでしまいたい。　〈6点〉

問七　**Ⅰ**　**ウ**　**Ⅱ**　**イ**　**Ⅲ**　**ア**　〈4点×3〉

計50点

竹取物語（かぐや姫の嘆き）　＊＊＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

ア八月十五日ばかりの月に出でゐて、かぐや姫、いといたく泣き給ふ。①人目も今はつつみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも、「何事ぞ。」と問ひ騒ぐ。かぐや姫、泣く泣く言ふ、「さきざきも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過ごし侍りつるなり。②さのみやはとて、うち出で侍りぬるぞ。おのが身は、この国の人にもあらず。月の都の人なり。それを、昔の契りありけるによりなむ、この世界にはまうで来たりける。今は帰るべきになりにければ、この月の十五日に、かのもとの国より、迎へに人々まうで来むず。さらず、まかりぬべければ、おほし嘆かむが悲しきことを、この春より、思ひ嘆き侍るなり。」と言ひて、いみじく泣くを、翁、「こは、なでふことのたまふぞ。竹の中より見つけ聞こえたりしかど、菜種の大きさおはせしを、わが丈立ち並ぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か迎へ聞こえむ。まさに許さむや。」と言ひて、「我こそ死なめ。」とて、泣きのしること、いと堪へがたげなり。

かぐや姫のいはく、「月の都の人にて、父母あり。片時の間とて、かの国よりまうで来しかども、かく、この国にはあまたの年を経ぬるになむありける。かの国の父母のこともおぼえず、ここには、かく久しく遊び聞こえて、慣らひ奉れり。③いみじからむ心地もせず、悲しくのみある。されど、おのが心ならず、まかりなむとする。」と言ひて、もろともにいみじう泣く。

使はるる人々も、年ごろ慣らひて、立ち別れなむことを、心ばへなどあてやかにうつくしかりつることを見慣らひて、恋しからむことの堪へがたく、湯水飲まれず、同じ心に嘆かしがりけり。

問一　二重傍線部ア～ウの漢字の読みを現代仮名遣いを用いて平仮名で書きなさい。

問二　点線部Ⅰ～Ⅲの主語として適当な人物を、本文中の人物名を用いて答えなさい。

問三　波線部A～Cの語の意味を答えなさい。

問四　かぐや姫が地上にやって来た原因を本文中から五字以内で抜き出しなさい。

問五　かぐや姫が天上に帰ってしまうことによる翁の悲しみを最もよく表している部分を本文中より十字以内で抜き出しなさい。（句読点は不要）

問六　天上と地上の違いについて具体的に説明しなさい。

問七　傍線部①～③を必要な言葉を補い、かつ文法事項を踏まえて現代語訳しなさい。

問七			問六	問五	問四	問三	問二	問一
③	②	①				A	Ⅰ	ア
								イ
							Ⅱ	
						B		ウ
							Ⅲ	
						C		

学年
組
番号
氏名
得点

竹取物語（かぐや姫の嘆き）　＊＊＊

〔出題の意図と留意点〕　重要古語を押さえて登場人物の心情把握をしっかり行いたい。**問四**は古文ではよく登場する考え方。**問五**は翁の悲しみ。**問六**はかぐや姫の成長にも関わる地上との違い。**問七**はかぐや姫の気持ちを捉えさせたい。

☆解答例と配点

問一　**ア**　はづき　**イ**　こ（むず）　**ウ**　へ（ぬる）　〈2点×3〉
問二　**Ⅰ**　親ども　**Ⅱ**　かぐや姫　**Ⅲ**　使はるる人々　〈2点×3〉
問三　**A**　前世からの因縁、宿縁　**B**　大声で騒ぐ　**C**　気立て　〈3点×3〉
問四　昔の契り　〈4点〉
問五　我こそ死なめ　〈4点〉
問六　天上での少しの時間が地上では多くの年月になるように、時間の長さに違いがある。　〈6点〉
問七　①　人目も今となっては遠慮なさらずお泣きになる。
②　ずっとそれでいられようかと思って、打ち明けるのでございます。
③　（月の都へ帰るのも）うれしく思われる気持ちがしません。　〈5点×3〉

計50点